

研究・調査報告書

報告書番号	担当
323	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)	
Alcohol consumption, drinking pattern, and self-reported visual impairment. アルコール消費と飲酒パターン、自己申告による視覚障害	
執筆者	
Fan AZ, Li Y, Zhang X, Klein R, Mokdad AH, Saaddine JB, Balluz L.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Ophthalmic Epidemiol. 2012 Feb;19(1):8-15.	
キーワード	
飲酒、視覚障害、飲酒量、飲酒頻度、暴飲	
要 旨	
目的： 飲酒状態と飲酒パターンが自己申告による視覚障害と関連があるか調査する。	
方法： 無作為乱数抽出による電話健康調査をもとにした全米成人に対する州ベースの生活習慣リスク因子調査システムから得られたデータを用いた。2005年と2006年にVIAEC(Visual Impairment and Access to Eye Care module)が50歳以上の成人42,713人に対して提供された。視覚障害とは、道路向こうの友人を確認すること、もしくは新聞、雑誌、レシピ、メニューの記載を読むこと、もしくは電話に記載された数字の判読することのいずれかにおいて苦勞した経験があることと定義した。飲酒パターンには飲酒量、飲酒頻度、暴飲が含まれる。	
結果： 年齢、性別、民族、教育、喫煙状態、BMI、循環器疾患既往歴、糖尿病、眼の疾患について調整を行い、現在の飲酒状態は遠近視覚障害と関連が認められなかった。しかしながら、1日1ドリンク以上(オッズ比1.21; 95% CI 1.09-1.35)と暴飲(オッズ比1.32; 95% CI, 1.14-1.53)は現在飲酒を行う人において視覚障害と関連が認められた。	
結論： 現在飲酒を行う人において、飲酒パターンは遠近視覚障害と有意に関連していた。飲酒ガイドラインを超えて飲酒する者、特に暴飲する者が、基準を超えないものに比較して、視覚障害に対してより高いリスクに晒されるかを確認するには長期にわたる調査が必要である。	